

そこに 学校があった

休廃校の歴史

昭和中学校 (上)



大道分校と共に船出

2025年9月号【昭和小学校(中)】で「昭和20年終戦。同22年学制改革が始まる。昭和国民学校は昭和小学校となり、高等科は昭和中学校となった」とあるように、1947(昭和22)年、昭和中学校は大道分校と共に船出した。大道分校はこの4年後独立して大道中学校となる。

記念すべき第一期卒業生は1947(昭和22)年度卒業生で17名。翌年の第二期卒業生も17名。この2学年は旧国民学校高等科からのスライド。つまり、開校前年の1946(昭和21)年度は旧国民学校高等科2年生だった生徒が、新年度の1947年4月から昭和中学校3年生に。同じく1年生は2年生にスライド進級したというわけだ。そして、次の学年が昭和中学校「最初の新1年生」となった。注目すべきは、この学年から一気に生徒数が増えていること。その数なんと53名!

17→17→53の意義と意味

生徒が一気に増えたというこの現象は、戦後日本再出発の象徴とも言える二つの要因が作用している。農地改革による農山村経済の改善と義務教育の厳格化によって、全ての子どもが学校へ行けるようになったのである。もちろん、これらの制度改革が決定打になったのだが、制度改革の前から「わが子をもっと学ばせてあげたい」という切実なる親心があったことを忘れてはならない。「学ばせたい、学びたい」という思いが、戦後の制度改革によって花開いた結果とも言える。これは、当時の日本では、地方の、とりわけ農漁山村のほぼ全域で起きていた現象で、それはここ昭和でも同じであった。

終戦までは、山村の子どもたちの多くは、小学校を卒業すると同時に、農林業など家業の労働力となったり、忙しい大人に代わって小さな兄弟姉妹の面倒を見た。そのため学校へ行けない、また、行けても数日という境遇にあった。そこに前述の「終戦後の革命とも言える制度改革」が断行された。昭和中学校最初の新入生「53」は、その結果である。とうとう、

子どもを学びの場に解き放つことができたという、実に晴れがましい数字であり、且つ、重い意味を持つ数字である。

校区に最も勢いがあった頃

昭和中学校でも、戦後の改革が身を結び「53」以降は時代が逆戻りすることなく、誰もが通学できるようになり、1980(昭和55)年まで1学年が30名を切ることはなかった。小学校を卒業した子どもが全員入学することは「相応しい入れ物」が要る。1951(昭和26)年に、現在の国道に沿う形で東西に長い校舎が新築され、その後も生徒数増加に合わせて増築を繰り返している。



1951(昭和26)年に建った校舎

全校生徒が最も多かった年は1962(昭和37)年度で199名。この世代はベビーブーム世代であることに加え、校区内の津賀発電所に四国電力の社宅があったことも生徒数増加に大きく作用した。また、山には、炭焼きに従事するために遠方からやってきた人もいて「昭和の中校区に最も勢いがあった頃では



旧校舎の正門。左側の門の根元が…。1965(昭和40)年頃(開校記念誌より)

ないか」と、当時を知る人は言う。ただ、まだまだ経済的には成長段階にあって、中学生ながら、アルバイトをしながら通学するという生徒も少なくなかった。(次回に続く)

町のうごき

(3月31日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	6,910	-61		男 3	15	27	76
女	7,476	-38		女 2	19	31	52
計	14,386	-99		計 5	34	58	128
世帯数	7,763	-38		(3月中の届出)			

窪川地域 10,292人 大正地域 1,969人 十和地域 2,125人